

1881年12月3日(土)

一八八一年十二月三日(土)

マノモハン邸における聖ラーマクリシュナ

ケーシャブ・セン、スレンドラ、ラジエンドラ・ミトラ、トライローキヤたちと

マノモハン氏の家——カルカッタ市シムリヤ通り二十三番地。スレンドラの邸の近くである。今日は十二月三日、土曜日。西暦一八八一年、ベンガル暦二二八八年オグロハヨン月十九日。

聖ラーマクリシュナは午後四時ごろお訪ねになった。家は小さい二階家で、狭い中庭がある。タクルは客間にお通りになる——一階の通りに面した部屋である。

ボバニプールのイシヤン・ムクジーが聖ラーマクリシュナと話をしている。

イシヤン「あなた様は何故、世間をお捨てになつたのですか？ 聖典には、世間に住んでいて修行するのが最上である、と書いてあります」

聖ラーマクリシュナ「何が良くて何が悪いかわからないよ。あの御方がさせる通りにしているだけさ。言わせる通りにしゃべっているだけ——」

イシヤン「もし皆が世間を捨てたら、神の御意志に反したことになります」

聖ラーマクリシュナ「何で皆が捨てるんだい？　だが、皆が皆、ジャツカルや野良犬みたいに、女と金に血道をあげているのがあの御方の希望なのか？　ほかに何か希望はないのかい？　どういふことがあの御方の希望で、どういふことが希望でないか、あなた、知っているのかね？

あなたは、世間で暮らすのが神の思召おぼしめしだと言う。だけど、女房や子供が死んだとき、それも神の思召しだと思えるかい？　食べていけなくなつたとき——貧乏のどん底におちて——そのときも、それも神の思召しだと思ふことができるのかい？

マーヤーのなかには、あの御方の思召しがどんなものか知ることとはできないんだよ。マーヤーのなかでは、その場限りのはかないものがいつまでも永久に続くように感じるし、その反対に、永遠不滅のものが幻のように値打ちのないもの感じられるんだ。世間のことは無常——今あつたかと思えば、次の瞬間にはなくなつていく。だが、あの御方のマーヤーのために、ちゃんといつまでも実在しているかのように感じられる。あの御方のマーヤーのおかげで、私は行動するゝと感じているんだよ。それから、私の妻子ゝ、私の兄弟姉妹ゝ、私の父母ゝ、私の家屋敷ゝなどと思ひ込んでゐるのさ。

マーヤーには無明と明智の二つがある。無明は世俗で、人をあざむき、神を忘れさせる——それから明智のマーヤー、つまり、智識、信仰、聖者・修道者との交わり——こういうものは神の方に連れていってくれる。

神の恵みをうけてマーヤーを乗り越えた方にとっては、すべてが平等おなじ——明智も無明もみな同じことだ。

俗世の住家は、苦樂の經驗をするところだ。

女と金の楽しみなんか所詮、どうなる？ サンデシユ(ミルク菓子)も喉元を過ぎれば、酸っぱかったのか甘かったのか、すぐ忘れてしまふ。

でも、すべての人が世俗の生活を捨ててらるうか？ 時期が来ないのに捨てられるかい？ 經驗をし尽したところでその時期が来る。無理に捨てられるものじゃないよ。

或る種の離欲がある。それを、^{ワアウラウキヤ}「サルの離欲」と言うがね、知性の低い人間がする離欲だ。父親のいない息子がいて、母さんが糸紡ぎをして生計をたてている。息子にも仕事があったんだが、それがだめになって——すると、息子は離欲ということになって、赫土色の衣を着てカーシーへ出かけていく。何日か経つと手紙がくる——こっちで仕事が見つかりました。月に十ルピーです。やがて、金の指輪だの洒落た上着だの買ったがる。快樂の欲求を卒業したなんて言えるかい？」

マノモハンの邸にて

ケーシヤブ・センがブラフマ協会の会員たちとやってきた。聖ラーマクリシユナは中庭に坐つておられた。ケーシヤブは近づいて大そう信愛の情を込め、かつ、恭々しくごあいさつ申し上げた。そしてタクールの左側に坐つた。右側にはラームが席に着いている。

しばらくの間、バーガヴァタの朗読があった。

朗読が終わつて、タクールはお話をなさる。中庭を囲んで在家の信者たちが坐つている。

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに向かつて) 世間で努めを果たしていくのは、大そう難しく苦
労なことだね。ひどい勢いでグルグル回れば、眼が回ってぶっ倒れてしまう。でも、柱にしっかりつ
かまっていれば心配ない。仕事をしていても神のことを忘れるな。

みんなは聞くだろう。そんなに難しいのならどうすればいいのか——方法みちは？

方法はね、アヴィヤーサ(訓練・ヨーガだ。郷里くわにで、大工のかみさんたちが、指をつぶさないよう
に気をつけながら脱穀機を踏んでいる一方で、赤ん坊に乳を飲ませている。そのうえ、お客と話まで
していた——こないだ貸したの、返してっておくんなさいね。なんて言つて……。

不貞な女は用事は何でも足しているが、心はいつも情人のことを思っている。

でも、こんな心境になるためには、ちよつとは修行をしなけりゃね。時々静かな所へ一人で行つて、
あの御方を呼ばなくては——。信仰をしつかりつかんでから世間の仕事をするのだ。カンタル(ジャッ
クフルーツ)の実をじかに割ろうとすれば手に汁がベタベタつくだろう——手に油をぬつてから割れば
ベトつかない」

中庭で歌がはじまった。ゆっくりとトライローキヤが歌い始めた。

栄光はえあれ 栄光はえあれ プラフマン

よろこびと美の極み——

タクールは嬉しそうに踊っておられる。いっしょにケーシャブたちも信者たちも踊っている。冬なのに、タクールは体に汗をかいておられた。

至福のキールタンが終わって皆が坐ると、聖ラーマクリシュナは、「何か少し食べたい」とおっしゃった。奥の間から甘い物が皿に盛られて運ばれてきた。ケーシャブはタクールが召し上がっておられる間中、その皿をずっと持っていた。ケーシャブはまた同じように、水の入ったグラスも持っていた。そして、タオルでお口のあたりをふいてさしあげた。そのあと、タクールを扇ぎはじめた。

聖ラーマクリシュナはこんど、世間で暮らしながらも法がなされるかどうか、お話しになる。

聖ラーマクリシュナ(ケーシャブたちに向かって)世間においてあの御方を呼ぶことのできる人々は、勇気のある雄々しい信者だ。頭に重い荷物をのせているのに、神をつかもうとして努力しているんだからね。こういう人を英雄信者と名付けている。

そういうことは大そう難しい、とお前たちは言うかも知れん。どんなに難しくたって、至聖かみの恵みがあれば成就できないことは何もないよ。不可能なことが可能になる。千年の間、真つ暗闇だった部屋に、もし光が入った場合、少しずつ明るくなるかね? いっぺんに部屋全体が明るくなるんだよ。これらの頼もしいお言葉を聞いて、ケーシャブはじめ在家の信者たちは心から喜んだ。

ケーシャブ「(ラジエンドラ・ミトラに向かって笑いながら)あなたのお宅でいつか、このような機会を持たれるといいですねえ」

ラジエンドラ「ええ、全くその通りです! ラーム、お前に何もかも任せるよ」

ラジェンドラは、ラームとマノモハンの伯父にあたる。

こんどは、タクールは奥の間にお通りになった。そこでご供養をうけられるのだろう。マノモハンの母上であるシャーマスンダリーが、すべて準備をととのえていた。聖ラーマクリシュナは座につかれ、甘いものをはじめ、すこぶる美味しそうながちそうが並んでいるのをご覧になって、タクールは破顔一笑され、楽しそうに召し上がりながら、「わたしのためにこんなにしてくれて……」とおっしゃった。皿のそばには氷の入った水のコップまで置いてあった。

ケーシヤブをはじめとする信者たちは中庭で食べていた。タクールは奥の間から下りてこられて、皆に食べさせてあげた。やがて、彼らを喜ばすために、ルチ（揚げパン）とムンダ（丸いお菓子）の歌を、踊りながら歌って下さった。

やがて、南神村トッキネーシヨルのお寺に戻られることになり、ケーシヤブはじめ信者たちは貸し馬車を呼び、タクールの御足の塵をいただいた。